

# お茶の水女子大学

## 附属幼稚園長を終えて

島田 淳子

三月で園長を終えた。とは言え実感はまだない。美しい園舎も園庭も、そこで遊ぶ園児達の姿も先生方の笑顔も、何もかもまだ私の頭の中でゴチャマゼになって躍動している。さまざまな体験が整理され、フィルターにかけられて思い出として定着するまでにはまだ相当時間がかかりそうである。

というわけで、本稿は表題から感じられるよう

な園長生活の総括などと言うものではなく、編者のお言葉に甘えてとりあえず心に浮かぶことを記すものであることをお断りしておく。

三年間に得たものはたくさんあるが、その大きな一つは私にとつての幼稚園の先生方である。三年前までは単にお茶大職員録に記された活字でしかなかった先生方が、今では「当たり前と言われ

ればそれまでだが、血もあり涙もある生きた人間である。それどころか、皆それぞれチャージングで私の心を捉えて離さない。

なぜだろう。何が私の心をこんなにも打つのだろうと、自問自答してみた。答えは、理想の保育をあくまでも具現しようとする、先生方のごまかしのない真摯な態度にあることに気づいた。御存知のようにこの幼稚園は、ひとりひとりの個性や発達段階に応じた自発的な生活を尊重しつつ、子どもの能力や情操を養うことを保育の理念にしている。しかし、一人の教師が三十五名の園児を受け持つ現在の体制の中で、この理念を実現するのは極めて困難である。保育の本質を考えれば考える程、ほとんど不可能ではないかと思えてくる。こんな中で、決して手を抜かず、その日の保育における問題を提起して話し合い、明日に備えての環境の整備など、きめ細かに保育に立ち向かう姿

に感服した。この思いは三年間に強くなる一方であった。

そんな先生方に、これらの保育の実践を研究として捉えてまとめることをお願いした。これだけ質の高い保育を世に知らしめることこそ先生方の使命であると思ったからである。今以上の負担をおかけすることを承知のうえでの、心痛みながらお願いであったが、先生方は快くそれに応えて下さり、以前からの研究会がより活発になっていく。

その成果が公表されるのを楽しみに待っている。

そうは言っても、保育の実践研究をまとめるのは容易なことではないと思う。私が行う食物科学の研究のように実験条件を設定することなどでできないからである。私に関わった一例をあげてみよ

う。園には一か月に一度お誕生会というのがあり、先生方が全園児を前に劇をして下さる。ある時、劇の途中で先生方が扮する登場人物（動物だったかも知れない）が突然舞台を降りて、園児の方に近づいてきた。ぐんと近くなった園児との距離と同じ高さ。インパクトが断然違ってくる。

園児はワーッと湧いて総立ちとなった。私は先生方のこの新しい試みに頭が下がる思いであった。

ところが一人、熱狂の外にいる子がいた。ぐつと歯を食いしばって、「立っちゃいけない」と叫んでいる。「立ちたい、立って見たい、でも立ってはいけない」という願望と自己規制を全身から発散させている。何といういじらしい自己規制だろう。こういう精神を皆が持てば、新聞の三面記事を賑わしている問題（見つからなければどんな悪いことをしても良いと思っているのではないかというも思う）のほとんどがなくなるのではない

だろうか。ともあれ保育者たる私はどうすべきだろう。他の子ども達を座らせることは不可能だし、その子を立たせてあげるのは彼の心の根本にある正義感のような、何か大切なものを壊すような気がする。一瞬の判断ができないでいるうちに「立っちゃいけない！」と叫びながらその子が前の子を殴ってしまった。不正（と彼が思っていること）に対する怒りが限界に達しての暴力。顔を真っ赤にして涙をこらえている彼に、暴力はいけないなどどうして言えようか。

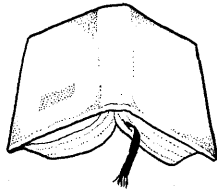
一方、殴られた方から見ると天災が降ってきたようなものである。没我の境地からいきなり現実を引き戻された彼は、後ろ向きになり、「何もしていないのにぶった！」と言いながら相手にかかってきた。

もちろんこの二人、私が「あつ、おもしろそう！」と叫んで舞台の方を指したら、すぐそちら

に気を取られ、園長先生の椅子に二人仲よく並んで座って、大満足で観劇が続けたが。

以上はほんの一例であるが、多くの考えるべき材料を含んでいるように思う。あくまで立たなかつた子をどう扱うかは、その子の個性や考え方によって異なってくるだろう。座って見ましようという約束がどういう状況のもとで、どの程度の強制力をもって行われ

たかも考慮しなければならぬ。また暴力についても、とにかく暴力はいけぬと単純に割り切れるものではない気がする。そうは言ってもあの状況の中で立ち上がってしまった



た子ども達を責めることはできない。ましてや意欲的な試みを取り入れて下さった先生方を責めることはできない（もつともこの話をしたらすぐに園児たちの席を工夫し、全員が見えるようにして下さった）。

いろいろ考えてみたがどうも一つの答えはないようである。継続的な保育の中で子どもを十二分に理解し、これらの蓄積を基に、その子の特徴やその日の状況などから総合的に判断せざるを得ないだろう。しかもその場での態度を瞬時に決める決断力が必要である。保育とは真の叡知と洞察力を必要とする大変な仕事であるつくづく思う。

こんな大変な仕事に全力投球しつつ、研究成果を世に出そうとさらなる努力を重ねている昨日までの同僚達に、心からのエールを送ってペンを置く。

（お茶の水女子大学）